



役者評判記

千13
3849
117





海遊記
紅筆書

手多13
3849
117

手13
3849
117





上野屋田玉持印



序

文今諸國諸列の芝居
 舞と鑑三都を以て
 上は三好又其地よつて
 各其趣を異るはまこと
 多末入ぬいぬさ嫌ひ大抵
 つりなり故に今論を想へ
 京橋を二松中巻げりて
 先京橋の狂言ハ舞臺文
 連の趣向多し舞臺を
 且後二日の狂言ハ後と
 宴のてお物をもりて

序

然るに多くは其の義を以て
靡るに及ぶ代は其の義を
以て護るべきを責代にして
遊を身におよぼす事

是大局あり

中入の夏を以て治る事
と成るは其の思社又忠孝老
實言其盜賊降一義との
難を以て國を去る事

七式後目あり

小幕の及外夏を以て笑ひ
を以て其の悪者義殿を

探とあて呆癡の奴僕
を以て其の遠く事をも小
幕とて其のまくとも云

三眼目の怒敵を以て其の

と次義を以て其の海濱の

三眼目と同じく地若の若心

は其のあつて狂言の服目と

其の及るは其の婦あど其の

為親のため其の身を以て

不化を責代にあつて其の

是を世諦場と云

又其の及るは其の再ひ其の

其者必び心身其起元
然しより自出安お直と
ゆに終る

是狂言の大切

先大揚げ趣向なりと雖
又二目的の報云二つを領て前
報云何々切狂言何々と
外題を二つ出は古とあり
さるはいた大伴の報云ハ
ち夫とのうそ切さるう
るら世話ののを多く
出とび其基とよる形り大畧

系方板大其居後後者同録
京四條御所其居名代早雲長を夫
同 南側其居名代 柳 方老夫
○又五日本名山つらつらるたのじ
△は平八島時体之旅りの形あり

▲客座

真上上吉 板東巻花の
上上吉 板東巻花の
物よりかかきかへた板東の書写山

▲立役巻軸

大上上吉 嵐巻三席
人気の盛ん立のちる 浅間山

▲立役三郎

大上上吉 実川巻三席
山家市で人々立のちる身延山
至上上吉 嵐巻三席

上上吉 三井梅舎△

上上吉 尾上松深△

上上吉 市川澁十席△

上上吉 市川澁十席△

上上吉 中山文七△

上上士 仲村竹三席△

上上士 三井源三助△

上上 嵐和三席△

上上 市川幸七席△

花頂山

三井梅舎△

尾上松深△

市川澁十席△

市川澁十席△

中山文七△

仲村竹三席△

三井源三助△

嵐和三席△

市川幸七席△

上上 嵐精二席△

上上 嵐麟子△

上上 市川新十席△

上上 中村壽席△

上上 三井徳人△

上上 嵐三十席△

上上 市川実良席△

上上 市川幸七席△

上上 市川幸七席△

嵐精二席△

嵐麟子△

市川新十席△

中村壽席△

三井徳人△

嵐三十席△

市川実良席△

市川幸七席△

市川幸七席△

上上

市川清盛所
市川景之助小

か三人とも子儀の仲で八関山

一坂田九郎有 一嵐岩之小所有

一市川福翁小 一実川小次郎小

一嵐陸之助也 一市川茂之有

一実川之助小 一市川市之有

一市川推市天 一市川千賀有

上上言 市川玉七天

何れぬ誂めの有る松岩乃金花山

上上言 市川龍之有

人氣とのくお名まへハ萬代山

▲立役善頭

大上吉 嵐崎之有

人氣うまゆて信仰する象頭山

▲立役後見

極上吉 嵐上之有

非後石思義の妙有る高野山

▲老幼三幅對

勿上吉 市川助之有

此年功だけ藤巻の車お大率山

勿上吉 市川助之有

湖と平ふまへハのあり 熊野山

勿上吉 嵐三之有

此は内ハ推がうてと 嵐三之有

▲実効後見

重上吉 市川友之有

又物小後をか(ま)そのみまのり後ハ葛城山

上上吉 市川友之有

何れでまはまけてまへる七面山

上上吉 市川友之有

左の勢ハ益益入の 金剛山

上上吉 市川友之有

かこの中ハ又込のり 根来山

名 七三

上上吉 浅尾勇山

及外の仕内ハ祝儀の上ふ成田山

上上吉 岩冠十席

まゝまらんと格物して 凡生山

上上吉 中山文八席

を以て仕内うたうたまかけた足摺山

上上吉 相嵩小六

あつて敬後いやくまをうた大仙山

上上吉 浅尾爲十席

ふふお款をえりふとけんか赤城山

上上吉 市川新外

ぶうを松4家を内提り成り大慶山

上上吉 生嶋安右衛門

まゝまらんと格物して 石櫃山

上上吉 岩倉余丸

お達共おかの身巻うたう小佛山

上上吉 市川黒猿

このまの妻いばおんの妙見山

片岡謙十席

岩倉右五席

実川大八席

岩倉三席

中村助天

實川鯨花

中村大重

市川助天

市川三徳

市川眼十席

市川中六席

市川五十席

中村熊右

市川五十席

中村熊右

市川五十席

直廻りにおつて東小達直廻り足尾山

上上

上上

何事も多量自中自在小さかき山

七五

此山勸があひのてはひいたる秋葉山

上上吉 尾上 芙蓉麓 小

お姿へのとてやさしへの 兵天山

上上吉 中山 一徳 △

元更役がせのさへ 笑之山

嵐六三席 △

中山 壹三 △

後川八巻 △

片岡 卯 △

後川八巻席 △

嵐 陽 △

尾上 當朝 △

とあつと舞者さへつらもお歌の白山

市川 等三助 △

片岡 松右席 △

山平 全枝 △

尾上 歌柳 △

上上士

上上

中村 好三助 天

皆此まきのあまへ 木昌山

上上士 中村 歌保世 天

此友人とも老母役のよふ似合針白髪山

上上吉 嵐 三右席 天

おくの山は下で舞者か余程此糸雲山

▲養女役後見

真上吉 中村 歌六 △

八京修のよる歌をまる比叡山

▲角鬘り後三郎

実川 延吉席 天

中村 梅三助 天

三掛 源八席 天

片岡 市旭 天

嵐 三席 天

中村 歌八 天

三條村に於て一河村中村に於て
水側と云

一河村に於て三河村に於て
一河村に於て三河村に於て
一河村に於て三河村に於て
一河村に於て三河村に於て
一河村に於て三河村に於て

▲狂言他者之部

南側

金史調

素河正徳

素河七三助

素河平吉

揚羽秋吉助

素河三津助

嶺琴八十助

北側

清水正徳

の産

菟雄慶治

清水正二

嶺琴香芽助

歡喜作

清水正六

清水歡助

成田紅助

清水賞七

の産

松鱸亭助

銀杏栗捕

井筒一泉

の郷

至正三冲

千鶴万葉集可

此如く之に被_レ處_レを_レす_レひ
安政五年十月十九日

釋教信

俗名

至上上吉

市川兼十郎

行年五十五

大坂野

光明寺

因_レ小_レ取_レ在_レ史_レで_レの_レ并_レ去_レる_レ十月
行_レ田_レ新_レ甚_レ石_レ由_レ出_レ勅_レの_レ効_レ斗_レは_レ次
と_レ急_レ病_レさ_レし_レ氣_レを_レさ_レく_レと_レ醫_レ療_レ
を_レ使_レを_レ治_レさ_レし_レとも_レま_レあ_レせ_レ付_レま_レは_レ次
して_レ此_レの_レ不_レ衰_レ泉_レの_レ宮_レと_レ成_レま_レさ_レ
并_レ之_レ信_レて_レは_レ知_レて_レは_レ年_レ中_レの_レ氣_レ浮_レ
を_レお_レ名_レ跡_レ小_レ中_レ上_レ并_レ去_レま_レ神_レの_レ症_レ
二_レの_レ病_レり_レ者_レ月_レ元_レの_レ友_レ枝_レ故_レを_レ門_レ
被_レ去_レ序_レす_レて_レ切_レの_レ元_レ乃_レより_レ長_レ上_レ中_レ
まで_レ出_レを_レ終_レ失_レの_レ中_レ終_レお_レ後_レ後_レ太_レ
を_レ元_レ上_レま_レ是_レ坂_レの_レ邊_レと_レ成_レ下_レ於_レ軍_レ女

小切被_レ去_レせ_レ忍_レ人_レを_レ又_レあ_レり_レ且_レは_レ氣
お_レ持_レま_レす_レて_レ中_レ命_レは_レ又_レ異_レは_レ難_レま_レ入
先_レの_レ所_レ也_レ本_レ様_レ安_レ大_レ高_レり_レに_レ被_レ一
お_レ取_レり_レ取_レり_レ安_レま_レお_レて_レ付_レこ_レお_レ取
あ_レま_レた_レど_レも_レの_レう_レを_レ推_レす_レの_レ思
ひ_レ外_レせ_レあ_レり_レ言_レは_レし_レ風_レを_レ又_レは_レ難_レま_レ安_レ
お_レ三人_レの_レ幕_レの_レ大_レ上_レの_レ二_レ段_レ目_レを_レ
矢_レ回_レ手_レを_レ又_レ出_レの_レ氣_レを_レ又_レ回_レ手_レを_レ
ヨ_レア_レの_レか_レ下_レの_レ後_レ之_レを_レ又_レ推_レす_レ
お_レ推_レす_レも_レ氣_レは_レよ_レり_レに_レ被_レ一_レを_レ
極_レ定_レし_レる_レ外_レを_レ又_レは_レ難_レま_レ安_レの_レだ_レん
ま_レり_レ幕_レの_レ大_レ上_レの_レ二_レ段_レ目_レを_レ
又_レひ_レが_レこの_レ十_レ段_レを_レ又_レ推_レす_レ幕_レの_レ功
差_レも_レ又_レは_レ難_レま_レ安_レの_レ功_レ
が_レ痛_レ多_レを_レ持_レて_レ又_レは_レ難_レま_レ安_レの_レ功_レ
さ_レく_レと_レす_レや_レ又_レは_レ難_レま_レ安_レの_レ功_レ
ハ_レ報_レ安_レの_レ幕_レを_レ又_レ推_レす_レの_レ功_レ

外へは惜しむるも外上イモイモ
ハ始終長病とてとげて出勤しあ
葉とてこのおとろくかガガガガ
[註] 此の久身方せめて一高の四角
を正彩ヤ上外

日年四月廿七日

夏岳院梅笑日妙信士

上上吉 三株箱丸

俗名 行年廿五

古ハ 東寺町本能寺

[註] 今このおとろくかガガガガ
見の花を散せしハ惜しむるは終
去三月系もさるる山出動もあ
去跡着山ふ旅おん編及[註] 取酒
本まで花たより出さるハ誠を
事とて口外ハおとろくかガガガ

味のものも有るまより及形車
おとろくかガガガ[註] 取酒
あつてさういふて山殿の翠葉
行をかんがひてりけりちを
く知杯こまふは内市着後ハ似合
む定家感心で今外ハ[註] 取酒
友女ハおとろくかガガガ
介とあふり外ハ併し友女ハ箱丸
や取酒の取あふりて有りと云さ
きハあつてさういふて山殿の翠
葉[註] 取酒
移をとりけりてまをさひでま
あつてさういふて山殿の翠
葉[註] 取酒
あつてさういふて山殿の翠
葉[註] 取酒
あつてさういふて山殿の翠
葉[註] 取酒

上上

獲八世と云ふ所ありしに三役ありて
 大役ありしをよふはこれなりと感
 へんは程々申す所なきは法外
 其名の森々たるは行ふことあり
 こと只一處人の市田向を於て外
 日年七月廿三日

俗名 中山も枝
 行年六十九

凡そ有枝史の事ハ役者世々の隈本
 とのふりては志意ありてなり行て
 一試小職をせむりの中をりて由來
 直一覽をみるべき

此介故人と部

市川福續
 市川福七
 市川福三
 市川福四
 市川福五
 市川福六
 市川福七
 市川福八
 市川福九
 市川福十

役者名山尽 藝品定

客座

真上上吉 坂東飛騨
 上上吉 坂東彦三郎

凡そ凡そ大い戸の形採りて其史で
 り外之この由上取て去其申の好へ
 此出初ま故也親子は不客座不まへ座
 外と老人成程を下や文故十三宮年不
 日産(初)より余程の由年切なり
 江戸より八島時大立其の(マ)ト下取部
 其のふき公碑不かりの去やれ(取)二
 の誓を雪月苑不三浦を陸後之席切
 嵐者共難史三人のたなり暮切
 たるかは何とら外せんと(取)二
 同てあるてんて由ま(取)二
 一は仕内ありまより及送流取まら返
 是とのふりふのむり(取)二やく
 三橋彩老の役(取)二 枝子たし(取)二

の由に討つて中絶して彼へ戻りまう
た人のにお持ちの程云あれはと人に
愁とてこゝ(兼外) 葛野 ありて取
雲助渡りまゝ人のいひを物議切後
まゝ返す持まうとて中分は 川内 吉原
を本意とて由月又への以上は云々
川内 吉原 取つたの後に京東並所にと
まゝておれ言を月花不子枝渡り
後見の太極そへ取まゝの由は太極
奴等とて軍助不後切せよとの意
を云ふは知志のやうとよかり外と
中京 二限月 取まゝは然(天) 然より使者
不承言元及より云上下おての出よか
つこ 葛野 渡久次を京原をせり
久せり知成程費用がわらうと外と
取 渡り去は異様不白柄まゝの取
小蒙を賢端をりて身後をりて渡入
村へ連て床を能人の次女と成てはる知
取 まそれく渡入村の世にせりて

た人をうけての端おたといおせりぬ
りて肩をぬいでお蒙をせりて
引との葛野の上へとつかりぬる知
をの事くはせぬ人極言史の極言男
まゝて有るふか台おや 又 取渡りお蒙
の及不おとぬい白井取んと名のと
控八と足才の名を合して由家の主室
友知見をな後してお蒙の取切まて
中分のおけ杯をお蒙おの甲蒙がの
お下りおてまゝ 取 渡りお蒙お
おの控を切程云伴勢音取不首人伯母
お蒙の三限行きとて評判よく次は名を
後吉院並所へお出動して後日吉原の
龜山とて伴の若と三本をまゝの先年
も太極とてお勅おかき不入とての
十月八日吉原並所へお出動してお程
新堂不新洞たの玉をな後切山城に
たをを源七限をお勅おいお沙汰く
取 何そお持まゝのまゝおりて

取
二

半をぢえせり下外せ何分息
 若水父何方をを評判がよふて
 中流是でより外は社ひつて外
 外は社ひつて外は社ひつて外
 ○**改** 松尾の音羽をいふ息窮
 水史てより外は交功この水上故そ別
 水親又法とも中の座出勅二の勢り
 書月元は久次改**改** 二辰目
 して元をより玉満子の着付不純
 編面不純の鬼衣をそ出くまぬ成
 程成羽の位がえへ外へ**娘** 紀一
 一寸をるがうたまり能い男トやゆへ
 どのとまる花**年** 増ハイ何ゆへ**娘** 蓮サア
 ね外とよふ**年** 増マ、何ゆへ**改** 東西
 くまより本舞差へあり**改** 經氣の
 ため内中も年への似合ぞ又物流不
 感ふて**改** 延義火殺たを分條を
 を用ひも及付不まる外拾やも形く去出
 来く**改** 延義取玉火殺出たのふも履法

持て杉楹不遠ふ知下主下流のたは
 不ろゆるもふを以てトの小せり故よて
 面をさすも外拾はたがう内仕内と
 の、實不感ふて**改** 延義後をのてこ
 出て是きあてせかふ不感近下かあ
 六出来く**改** 二没持野はくさく取
 るて元乃より取もふ舞をば上下小
 言はる持て出る不**改** 延義は元年故入持者
 史の法さすも風候実不再来らと思ひ
 外とまより本舞差へあり立共部持ひ
 又人のたまり希ひ返上あつて**改**
 昭目えへば不娘た成も故か勅自拍子
 横不もて**改** 延義元乃りの出た能事のる
 ぬけ同あり大高りく**改** 延義引核より三
 西の石能事考飛く**改** 延義は信教向ハ
 故人既在火は表をて物りも**改** 延義
 改されらねぬ内候用事掌てより外と
 出たソリヤを答てより外不候よはあ
 表の中村持炭火ははくまの筆で
 台外**改** 延義大切持は其も源のまき丸

及正生松翁女長女との出た白猪を
枝子ゆきまきりあつたさく人形のようふに
らり外にぞき置置功よりより経新々よふて
お仕合せし（四）は若女不とよの根つぎ
を渡され外に（五）そんあふ新水共は若
女の実るまのふて置きまらふ（六）九換り
けらり外に若女共は今年上げ成林に及
若女への使さ本との女を由賜えと成林と
及若女の女へふ跡出生までおきり外
（七）四月よりい京京益成屋出勤こと
お程云は美徳を月元まて生は京久次
及川京大坂でつることいさつひ遠ひで
今り外に（八）ソリヤそ袋でらり外に及
の若と付舞臺のさたあさ丸で田舎
益成屋なる振おり外にちつと益成屋の
小云をちささめと限く若と付お成林
大馬寛梅と時代のを思へばあをり
りしてさるい金子を却て又物お成林
いあ振お成林と上は若女とと大分むり
が何振おでらり外に悦は梅別とつと
るも勇直不強こんて布ふらり外（九）四

く行心の懸て譯お新更へ内用捨く
美盛二役持降はさふそ之懸長女延若
共生若女四人のなんまり幕り元中り
く（一）既天後狂言比翼縁お白井控八段
業を揚りう去夜の腹すて差さるか付角
と又（二）併せあへた（三）かつらの子合があら
うあふらり外に若女大津張の若女連の振
お有と云も物振いさんちを振お志て下りか
らり外に（四）既天大初お月へお云おまら
娘を成らり引後三の面の不催り大坂
おてと大南り也是えりかめ老人（五）チット
あひぞくもとつりどや金作あの新更
及成りうあつもののがお梅おより吉如の
厚をゆめあつさんまをへ下海りて馬帽
おむけより引後お成と下は奴らとまな
たらの若女立付をさして三の面の不地
度入より鬼女の姿ぶらあこのどやおと
まひが引りけ九変化七変化のようお
能事あふ其を氣でふるか先はえ根中村

名
四

湯谷の名ろと録を世云のなると
 まる不ばかハ忠恕を有ると有る也
 直より録て存内ハ様の実本が有れ
 るとき責不成内教而て存之也ハ録
 巻を諸との正知と形後ハ正知の
 度で有る事ハあつた同ハ房後でも
 岩屋とハ大かこのけの遠さハ後也
 由川とハ後録がさういふハ存まら
 せバツリヤを後下やをせの茶子ハ
 各人ハ喚れと人あれははる因後まうハ
 志下ハれ外と云んや録録ハハま
 何のさハハよりかこまされたのハ
 ソリヤ無業の人の同ハハもさでもよ
 の下や **トキ** 無業とハ推ハハのよ
ヲ 東廻く行んの花野中坊で
 せり各ハ内利持く山ハ廟ハは教外
ミ 松野ハ後矣因事ハ降ハ味
 志ハ本教尚がハハ無業上ヲをりてハ

と録を板を切てお果る近者といふ
 知がのて録と云く **トキ** 三浦第
 カマそ子おて出さしハお村まへて
 中分あり **ヲ** 香煙ハ法実ハ村あり
 志と変て衣なちへて退てハ法壇の
 戻して法実ハ退分さくと教めとも
 皮ハぬハ大衆をねハハ大直舞ハ何
 下ややと云くハハハハハハハハハハ
 へかせあハハ **ヲ** 演の城ハ戻して難
 龜壳ハ三人のた金り幕切退さハ
 復ハあり **ヲ** 老人ハ往云の始ハハ京和元
 西良角ノ度二の勢ハハハ其忍達測
 とハハハハハハハハハハハハハハハハ
 親ハの法ハハハハハハハハハハハハ
 有ハ其後文改ハ三寛年ノ二ハハハハ
 矢法角ノ度ハハハハハハハハハハハハ
 法ハハハハハハハハハハハハハハハハ

世為天啓識ノ者存不て出まきし
又抽一疏不収ひ計之 **三** 思ひに知
らむに世間と教又命夫より森る
遠く入てなひ有りしは仕内や分は
文出来く **四** 後みふらふかありの
盗賊也切合ふふをたじしは才の
長を後ふ返はあはれあはれあふ
とめ計不あうく **五** 後三徳三徳を
よめて **六** 後三下取あちちと侍て
外ふは世の仕とて文致は未年の
二テ警り既後其存してけい世揚柳様
の世の所本津存しといふ後て
のちふ世世といふ **七** 三日月の若者
う波され女房のむね夫よて親う
は世世子方しては世世の場がけ
大島りそ有ころう直して **八** 三十七年
の成計 **九** 世 **十** 世 **十一** 世 **十二** 世

世とふふに教え入かあふたを
世とふ **一** 三日月を久次公の
とを世とふと主君の麻を収て
より **二** 兼考へ押店一の知
よかつく **三** 世 **四** 世 **五** 世
らふかと思ひの外何人の若もの
お教さるといふいふいふの
あはれとらふふふふふふふ
六 世 **七** 世 **八** 世 **九** 世 **十** 世
もの世 **十一** 世 **十二** 世 **十三** 世
ありの目と世 **十四** 世 **十五** 世

左ののやサアアの不義を詳く
去妻角の産一のなり莫竹紙小
大肉より極後席切岩玉山の腹そ
二葉料の不思義まで面体多
角助の次女と名なり下奴の振へ味ひ
とのでらり神の場二辰月まで奴の
なまの大各寄級を喰ふ所存さん赤
ま輝い社内いけかかふ所存外
後京任のまふが重首を討るま
と義さるお社内へ又の非せあへど
あれたけ極の南時けお人ふとあ非
老人は及の先年故人延義史う被れ
ハ大ら思ひ入の遠やふあつてあ所
そらに島てらまててが隠隠史のハ
エト利はまざるよふ系存神く
又してもくち醒めがけて故人ごと
其招不故人有て及の及去の事まで

ことよのまのふ既夫 東あつて二やく
下等松但る後 大席大肉飯
一宛お東寄寄をてやとまてまてたう
くの系思ひ入ふぞく 友を史やく
八重那が湯かざるをぬる社内味ひ
とのでらり神の場 山の腹まで岩玉へ
瀬おとされ隠 寛史のまらちふ小助
らま系系をまらふ毒筆由 取まき
連列状小血割してぬる 返まわつて
く 瀬の腹まで肉へ交り助す
史後常力ふ及送人一味の其方と連判
をえ世法のわらう一かまひと取をまら
る抱狂云故人存お史の面影有て
大出果くは及の島時けか余限中
まは 丹後が色子を初り 越我
た然とんと道ての 大勢の惣老をお
まわて大志廻りう招不お役までハ

三つと費用が那をきけりて大に
切腹松田合戦中より市
後高の板額不始をきけりお別ふかり
板額をいを破るをえむねとせよ
分たる社内よのぞく
[四]切腹の限を
降市をききしをきり悲び後あてたより
[五]門前小松内の子を考つて
[六]石目何ん中を是とのゆえに
[七]祇園よの女とや討そふあといふ
[八]おぼろてうろてはるか社内
[九]板額は深く実不感心
[十]切腹
[十一]切腹
小僧小大異名文後殺さるとして
より後切不戻りか馬の付外て
[十二]あまてとか勅由中分
[十三]後
[十四]おのたまは五平五後武部
[十五]の

三後をき勅毎家の後田かま小
くこと引はらひて名あ岸松田
はらひてあねはは矢張夜の三後
りて切不初物の西に交をき勅
[十六]の印の大入り大入
[十七]又云名
[十八]浦
[十九]右云
[二十]又云
[二十一]又云
[二十二]又云
[二十三]又云
[二十四]又云
[二十五]又云
[二十六]又云
[二十七]又云
[二十八]又云
[二十九]又云
[三十]又云
[三十一]又云
[三十二]又云
[三十三]又云
[三十四]又云
[三十五]又云
[三十六]又云
[三十七]又云
[三十八]又云
[三十九]又云
[四十]又云
[四十一]又云
[四十二]又云
[四十三]又云
[四十四]又云
[四十五]又云
[四十六]又云
[四十七]又云
[四十八]又云
[四十九]又云
[五十]又云
[五十一]又云
[五十二]又云
[五十三]又云
[五十四]又云
[五十五]又云
[五十六]又云
[五十七]又云
[五十八]又云
[五十九]又云
[六十]又云
[六十一]又云
[六十二]又云
[六十三]又云
[六十四]又云
[六十五]又云
[六十六]又云
[六十七]又云
[六十八]又云
[六十九]又云
[七十]又云
[七十一]又云
[七十二]又云
[七十三]又云
[七十四]又云
[七十五]又云
[七十六]又云
[七十七]又云
[七十八]又云
[七十九]又云
[八十]又云
[八十一]又云
[八十二]又云
[八十三]又云
[八十四]又云
[八十五]又云
[八十六]又云
[八十七]又云
[八十八]又云
[八十九]又云
[九十]又云
[九十一]又云
[九十二]又云
[九十三]又云
[九十四]又云
[九十五]又云
[九十六]又云
[九十七]又云
[九十八]又云
[九十九]又云
[一百]又云

奴玉が波され、とハ口幕する又侍
織を駕ふ家にて内侍でも白の
跡をふ家懸けけりふちとて
宅をもちて居るは侍とてふあけ
祓に衣鉢の福徳失のふ事只ふ大坂
と幕を腹で有とて南麻布より又坂
迄山ごへ何里有と思ふて居る
のドや部々ぬ北連をまが重ちる
よふ穴をえこの下や既在也
よいふ人ふおれと申す二丈ヶ嶽の
ふ重ちて井柱をの失ふ奥山失か三
の立廻をけなる又後味を
ふふけ後を切て後府をつらと
山一各馬を柱地へ戻し返す方
あふ出来く既切廻去堀山境
ふ坂田今侍後既元々よるふ出
成程ちのそふ又一外とて津巻へ

東て尾曾見失の山境よの何ひまの
ふさくま候あし真のまが
あつて分れとあれせむ怪のく
辰切巻をわふふしてのこふた地
かおとらうてよふ既先
高内之立役の業去やと書信をく
上上土口會三掛梅舎△
既渡安史でらむ去去三の形を
既後意をたて深分總本中なる本
密の行村宮と名の二役お持ちて
中分既切三役山形を養至ハ何
トやかととるしやうふ外既切
同言川不夫取吉の衣目候一人お
兼入得まものく決ハ京南書有へ
巾出勤とて孫脊山お持人書二役
川東のつと喰たりませあふ二役
入麻大臣候のふ根取らる外と

たら右風赤八奈でる送人とるんへ
 兼赤と四五其後大坂をいし
 其後山小の初て新芝不新洞左
 出の今歳上布五條の三三三へゆく
 行きもよく六月の末迄芝赤へ
 出てくるてきく由初九月より八松
 船共不付て俵舟松坂芝赤より各
 右を芝赤へ出るとの程さう我志の
 かきよひて本座の出力を倍せし
上上土呂尾上松緑△
四五系極を失ひ南系は未極外
 此座より尾赤名赤を向り島八
 月以ハ俵舟松坂芝赤よ各赤あり
 出さされ又各赤を向りといふと
 するぬ故取有て本座の出力物を
 まつて居りし
上上土呂市川流十席

四五市川赤の赤のつさり社とテ
 らしは去去赤中の産を月産小
 仙石種平後四五大座より船共赤
 の出合お違者赤赤を今赤と
 二役奴梅平赤いまの赤ひを赤い
 せんて赤赤へ度里赤うた人の赤赤
 くりと赤赤とては坊ま赤赤の
 大赤とて四五斤相と元古同赤と
 有る赤赤とるお取ハ又赤赤と
 其後赤赤赤市芝赤赤とて芝赤
 小演赤赤七細川赤元後赤赤の三
 役何事と俵刺よく切小赤の左風
 を赤赤れが赤赤の外大出赤赤の
 習り平赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
 赤赤赤料理人赤赤赤赤赤赤赤
 又より赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
 赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤

大坂を焚きぬ
申す事ごとく
ひの由世世を結ぶるなり

上上  山崎松次郎

二の誓の葉付秋の葉とて
お初月より入る御流流き
まて海花梅の津新五郎
貴人多し御流の程を
は程々の文政御流
坂人の後を御流
まて美田の御流
て御流の御流
御流の御流
御流の御流

上上  山崎 藤子

中の度一の誓の葉
集の御流の御流
まて御流の御流
御流の御流
御流の御流
御流の御流
御流の御流
御流の御流
御流の御流
御流の御流

御流の御流

△此外の志後の流中のみ自派の祀所
上上吉 中村 至七 天
上上吉 中村 龍菴 天

○五組 中村 龍菴 天
○六組 中村 龍菴 天
○七組 中村 龍菴 天
○八組 中村 龍菴 天
○九組 中村 龍菴 天
○十組 中村 龍菴 天
○十一組 中村 龍菴 天
○十二組 中村 龍菴 天
○十三組 中村 龍菴 天
○十四組 中村 龍菴 天
○十五組 中村 龍菴 天
○十六組 中村 龍菴 天
○十七組 中村 龍菴 天
○十八組 中村 龍菴 天
○十九組 中村 龍菴 天
○二十組 中村 龍菴 天
○二十一組 中村 龍菴 天
○二十二組 中村 龍菴 天
○二十三組 中村 龍菴 天
○二十四組 中村 龍菴 天
○二十五組 中村 龍菴 天
○二十六組 中村 龍菴 天
○二十七組 中村 龍菴 天
○二十八組 中村 龍菴 天
○二十九組 中村 龍菴 天
○三十組 中村 龍菴 天
○三十一組 中村 龍菴 天
○三十二組 中村 龍菴 天
○三十三組 中村 龍菴 天
○三十四組 中村 龍菴 天
○三十五組 中村 龍菴 天
○三十六組 中村 龍菴 天
○三十七組 中村 龍菴 天
○三十八組 中村 龍菴 天
○三十九組 中村 龍菴 天
○四十組 中村 龍菴 天
○四十一組 中村 龍菴 天
○四十二組 中村 龍菴 天
○四十三組 中村 龍菴 天
○四十四組 中村 龍菴 天
○四十五組 中村 龍菴 天
○四十六組 中村 龍菴 天
○四十七組 中村 龍菴 天
○四十八組 中村 龍菴 天
○四十九組 中村 龍菴 天
○五十組 中村 龍菴 天

予ニ志を車に乗せしめて出づる所
又物ぐ長びたて 豊運 祈らるるを
一男を以て之れ後おいららるる所
山形をの限りのを於山の限迄お後
と書かれしを 毎に枕を後して床
切ぬる所とあるに通るものなり
△五組 中村 龍菴 天
△六組 中村 龍菴 天
△七組 中村 龍菴 天
△八組 中村 龍菴 天
△九組 中村 龍菴 天
△十組 中村 龍菴 天
△十一組 中村 龍菴 天
△十二組 中村 龍菴 天
△十三組 中村 龍菴 天
△十四組 中村 龍菴 天
△十五組 中村 龍菴 天
△十六組 中村 龍菴 天
△十七組 中村 龍菴 天
△十八組 中村 龍菴 天
△十九組 中村 龍菴 天
△二十組 中村 龍菴 天
△二十一組 中村 龍菴 天
△二十二組 中村 龍菴 天
△二十三組 中村 龍菴 天
△二十四組 中村 龍菴 天
△二十五組 中村 龍菴 天
△二十六組 中村 龍菴 天
△二十七組 中村 龍菴 天
△二十八組 中村 龍菴 天
△二十九組 中村 龍菴 天
△三十組 中村 龍菴 天
△三十一組 中村 龍菴 天
△三十二組 中村 龍菴 天
△三十三組 中村 龍菴 天
△三十四組 中村 龍菴 天
△三十五組 中村 龍菴 天
△三十六組 中村 龍菴 天
△三十七組 中村 龍菴 天
△三十八組 中村 龍菴 天
△三十九組 中村 龍菴 天
△四十組 中村 龍菴 天
△四十一組 中村 龍菴 天
△四十二組 中村 龍菴 天
△四十三組 中村 龍菴 天
△四十四組 中村 龍菴 天
△四十五組 中村 龍菴 天
△四十六組 中村 龍菴 天
△四十七組 中村 龍菴 天
△四十八組 中村 龍菴 天
△四十九組 中村 龍菴 天
△五十組 中村 龍菴 天

有美人の由緒と據り^四ねの目に出
がかり^三の^二何^一と^三何^二と^一なれ^三と^二左
大入の由美人のかま^二と^一ま^三と^二左
里のかれ^二と^一花^三と^二花^一の^三花^二の^一花^三
外^二の^一花^三の^二花^一の^三花^二の^一花^三

大上上吉^三山^二山^一 晴寛

此^三は^二山^一の^三山^二の^一山^三の^二山^一の^三山^二の^一山^三
山^二の^一山^三の^二山^一の^三山^二の^一山^三
山^二の^一山^三の^二山^一の^三山^二の^一山^三
山^二の^一山^三の^二山^一の^三山^二の^一山^三
山^二の^一山^三の^二山^一の^三山^二の^一山^三
山^二の^一山^三の^二山^一の^三山^二の^一山^三
山^二の^一山^三の^二山^一の^三山^二の^一山^三
山^二の^一山^三の^二山^一の^三山^二の^一山^三
山^二の^一山^三の^二山^一の^三山^二の^一山^三
山^二の^一山^三の^二山^一の^三山^二の^一山^三

分^三の^二分^一の^三分^二の^一分^三
分^二の^一分^三の^二分^一の^三分^二の^一分^三
分^二の^一分^三の^二分^一の^三分^二の^一分^三
分^二の^一分^三の^二分^一の^三分^二の^一分^三
分^二の^一分^三の^二分^一の^三分^二の^一分^三
分^二の^一分^三の^二分^一の^三分^二の^一分^三
分^二の^一分^三の^二分^一の^三分^二の^一分^三
分^二の^一分^三の^二分^一の^三分^二の^一分^三
分^二の^一分^三の^二分^一の^三分^二の^一分^三
分^二の^一分^三の^二分^一の^三分^二の^一分^三

が三の切まで子根のほろ勢をさる敷
より入て積子赤子入る中六のま
せぬらと子根をたらしとてして
も積をよとてのひ上下の台は内
はるらとらむらぬ後写らう今昔と
又出来し正キころはえあんとき
のぞて又あつらん人老入積あま戸
美出外は積まが又貴入極の津はて
ハ取入極勢夫の島で蓋してあつた
る物とたはらふらふ入保すまは九月
中の産まぬ人の慶多の夫が胎でと疾
し胎に積りてとあつたのまど夜を起
して自らのかゝりてとてくると門の
たかあはけうよと持母あつて門のま
びをまどとあつていひとあつたが女の積
色とあつてと極の大津判とあつた
三の切まらふはと極勢入夫のふは積り

赤若うこころはなほまらとこんあ
子を誰が産と杯やとれ積つらう
とあふ積されら赤子をたらしと積
じぬらと入場ありう沃出で分れら
血の忍ひの結が切て有をりてくらの
結がらと分れらとあつたあつら
とむあつたあつたあつたあつた
積りてあつたあつたあつたあつた
廻りあつたあつたあつたあつた
こゝろは難波の女とあつたあつた
よあふ入あつたあつたあつたあつた
さるらと積あつたあつたあつたあつた
積あつたあつたあつたあつたあつた
けらあつたあつたあつたあつたあつた
のの市とあつたあつたあつたあつた
うらあつたあつたあつたあつたあつた
小あつたあつたあつたあつたあつた

何と申すも南は海に知れはる
あつて **三**は場所の殊なり
巖狎火のおもふ **四**は
お百姓もはげしむる **五**は
町の交り **六**は **七**は
庚の智 **八**は **九**は
業 **十**は **十一**は
物 **十二**は **十三**は
於火の後 **十四**は
切 **十五**は
の子 **十六**は
系 **十七**は
大江 **十八**は
は **十九**は
度 **二十**は
而 **二十一**は

一は **二**は **三**は **四**は **五**は **六**は **七**は **八**は **九**は **十**は **十一**は **十二**は **十三**は **十四**は **十五**は **十六**は **十七**は **十八**は **十九**は **二十**は **二十一**は **二十二**は **二十三**は **二十四**は **二十五**は **二十六**は **二十七**は **二十八**は **二十九**は **三十**は **三十一**は **三十二**は **三十三**は **三十四**は **三十五**は **三十六**は **三十七**は **三十八**は **三十九**は **四十**は **四十一**は **四十二**は **四十三**は **四十四**は **四十五**は **四十六**は **四十七**は **四十八**は **四十九**は **五十**は **五十一**は **五十二**は **五十三**は **五十四**は **五十五**は **五十六**は **五十七**は **五十八**は **五十九**は **六十**は **六十一**は **六十二**は **六十三**は **六十四**は **六十五**は **六十六**は **六十七**は **六十八**は **六十九**は **七十**は **七十一**は **七十二**は **七十三**は **七十四**は **七十五**は **七十六**は **七十七**は **七十八**は **七十九**は **八十**は **八十一**は **八十二**は **八十三**は **八十四**は **八十五**は **八十六**は **八十七**は **八十八**は **八十九**は **九十**は **九十一**は **九十二**は **九十三**は **九十四**は **九十五**は **九十六**は **九十七**は **九十八**は **九十九**は **百**は

おは国の邊におもはりの細い湯まで
後をこぼれおぼろのまゝ通つて自
然と首がぬげると大腕ぬきおぼ
肉獨ぼのおぼろのまゝしきぞおの
今更見せぬまゝのまゝのまゝの
[註] 切腹と魁山洗おのまゝのまゝの
洋紋のまゝのまゝのまゝのまゝの
く [註] 切腹おは国のまゝのまゝの
がおよこのまゝのまゝのまゝのまゝの
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
おのまゝのまゝのまゝのまゝの
二井大のまゝのまゝのまゝのまゝの
しが何おは国のまゝのまゝのまゝの
登りおのまゝのまゝのまゝのまゝの
自腹とおぼろのまゝのまゝのまゝの
おぼろのまゝのまゝのまゝのまゝの
時一更のまゝのまゝのまゝのまゝの

一冊評判記

おぼろのまゝのまゝのまゝのまゝの

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

安政六
己未春

復者名山盡下

卷之三

女調子の役者
 場をのりきと不ふ子こ
 自まら下したと排わ入いしし
 津つも人ひとまよ合あのの子この
 土間どま棧さんああうう喫あらら
 じじああらら肝かん染せんん
 御ご見み以い負ふのの弾ひ々々
 自ま笑わらいい
 自ま笑わらいい

京大坂大参辰敷後者目録

京四條御堂番名代 早はや各かく衆しゆのの頭かぶ
 同南例芝居名代 柳やなぎ万まん方ばんのの頭かぶ

△は平八由時休と旅ののび
 ○はええええ外題よりえのび

真上吉 坂東龜籠かめかご

上上吉 坂東三郎ざんぱう

▲惣巻そうまき頭かぶ

大上上吉 尾上多見おしの上

▲立役たちやく巻頭まきかぶ

大上上吉 嵐あらし橋はし寛かん

京 京

行役之盛も詠よらぬ雨夜様

▲五段巻袖

至上上吉

嵐吉三節

此はイキハツ方より多し以て

▲五段之部

至上上吉

寶川延三節

此は夜よか如中より多し

至上上吉

嵐陽三節

小夜のさくさくは嵐の夜を

至上上吉

三掛栴舎

を比はよりこれ切ぬ時

至上上吉

中村玉七

此は後よりあはれり

至上上吉

中村宛三節

此は夜よか如中より多し

至上上吉

市川流十節

流の流がゆるり

至上上吉

三掛流三節

此は夜の流のさくさく

至上上吉

嵐和三節

此は夜よか如中より多し

至上上吉

市川新井

此は夜の流のさくさく

至上上吉

嵐舞子

此は夜の流のさくさく

至上上吉

市川春流

此は夜の流のさくさく

至上上吉

浅尾胡三節

此は夜の流のさくさく

至上上吉

中山文七

此は夜の流のさくさく

至上上吉

嵐栴舎

此は夜の流のさくさく

上上

市川 宗徳 △

おとんとともいふこととわらふ

上上

三井 他人 △

中村 行三 △

いふともいふこととまの徳と

上上

河 徳三 △

市川 宗徳 △

中村 宗徳 △

いふともいふこととまの徳と

上上

中村 政次 △

市川 宗徳 △

中村 宗徳 △

中村 宗徳 △

いふともいふこととまの徳と

上上

市川 宗徳 △

市川 宗徳 △

市川 宗徳 △

いふともいふこととまの徳と

中村 宗徳 △

市川 宗徳 △

市川 宗徳 △

市川 宗徳 △

市川 宗徳 △

いふともいふこととまの徳と

市川 宗徳 △

市川 宗徳 △

市川 宗徳 △

市川 宗徳 △

上上

上上

上上

市川 宗徳 △

実川小延次 小

いれもきぬとれて びる丸

▲ 舞臺納

二世一代 市川助三郎

舞臺納よりゆきとる

▲ 後見

大上吉 三掛大次郎 も

とあて奥のうゝい系各の

▲ 実西巻頭

大上吉 行園市兵衛 も

実西巻頭のいひてぬき系

▲ 実西款没之郎

至上吉 中村友三 小

実西巻頭のいひてぬき系

上上吉 中村権三 も

市川服十郎 小

嵐松久兵衛 も

大谷福兵衛 △

市川服巻 小

市川多羅蔵 も

嵐勝三郎 小

市川夜西巻 △

市川小六郎 小

大谷辰次郎 △

市川おちと △

市川園内 △

尾上多兵衛 △

尾上吟兵衛 △

中山百蔵 △

上上

いれもきぬとれて

▲別項

真上上吉

中村秋六 △

中園うらのひねと松と

▲若女形之部

至上上吉

山平金作 △

藤の侍のつとむらじと別項

至上上吉

尾上茶茶郎 △

小まね新のつとむらじと別項

至上上吉

嵐三六郎 △

山崎のつとむらじと別項

上上吉

坂川友長 △

とらふとつとむらじと別項

上上上

中村千之助 △

狂言のつとむらじと別項

上上上

沢村其巻 △

上上上

尾上其巻 △

とらふとつとむらじと別項

上上上

中山一徳 △

今ありつとむらじと別項

中山登三 △

嵐村 △

嵐村 △

坂川八郎 △

中村琴三 △

中村の房 △

行松 △

嵐大三 △

上上

行松 △

嵐大三 △

つとむらじのつとむらじ

淡尾房之介 △
尚和三四也

此れもよきと致者のいふ所

▲西彼者越前

古今
大槩天香

市川海老蔵 △

上人
上巻と下巻をいふ今の所

▲頭取之部

三橋亀次郎

南側

多為忠徳市
市川團十

小側

行宮市市集

▲頼子之部

小側之部

一 騎中村富三郎

一 降る行幸流花巻

一 三 彦山崎孝三郎

一 三 彦山崎流次郎市

一 彦山崎徳三郎

一 降る行幸三木孝夫

一 彦中村佐衣

一 三 彦山崎流花巻市

一 彦中村正陸

一 彦中村孝三郎

南側之部

一 彦中村彦三郎

一 降る行幸徳孝夫

一 彦中村新三郎

一 三 彦山崎流花巻市

一 彦山崎彦三郎

一 降る行幸徳孝夫

一 彦中村彦三郎

一 彦山崎流花巻市

▲狂言作者之部

小側之部

清水正徳

菊雄慶次

清あり正二

廣琴香齋

欽 森 他

清水正六

清水欽助

成田欽助

清水實七

南例之序

金史綱

宗河七前

宗河政務

宗河平友

揚子欽助
宗河三前助

崩妻全助

故人

松鱸亭助
井筒一泉

千手重地万景集下

所披 系

辨別記の條の明曆の頃より修附して
累年がむ尚書思ひの程の其續
自矢り傳へ身く近き事毎年とつと
いふ古師の傳いも只今併元祖宗水
史の秘史の條(當時)可起天徳の傳い
今も猶合に心と傳へたり近き事
弟の傳いも欽助は深き程の事別

此後食糧仕内より三 又もつて多くとほどけの妙でより 外に何れもと刻更らるるに実を備 懐ふかきでより外四 後切き為 分付けて仁田の西を源の救給物 事とさうたる夏は係し何をも されてと仇矢あり津刺がよめて おは合せく

上上 實川茶葉

五 茶葉は其の源を境京 橋東源茶より水門の直通より 此方より茶葉はあけ下のふか さうて得まる如く程はよあが りまげとあり

上上 實川大八

六 大八は其の源を二階雲刑部 美原操陣よとぞ切柄丸と云ふ

小後産茶は其の源を境京 橋東源茶より水門の直通より 此方より茶葉はあけ下のふか さうて得まる如く程はよあが りまげとあり

上上 吉 實川富源

七 井筒茶は其の源を境京 橋東源茶より水門の直通より 此方より茶葉はあけ下のふか さうて得まる如く程はよあが りまげとあり

上上 吉 山風冠十席

八 山風冠は其の源を境京 橋東源茶より水門の直通より 此方より茶葉はあけ下のふか さうて得まる如く程はよあが りまげとあり

名 下四

言傳ありし金銀板をよみしる
如きうたは後述の國語切符の著者
は凡そ倉庫の及ばぬ大板でも
銀文の形を後を窺ふ事しと云き
このと陰より并せあへば後述の
いふでと木板の金文を本意以後
みよの程を又ふりて又總をわら
是との商賣の如くゆきし
[註] 重宝の形とさして志すは形
こそ其まはつとまの同と飛ぶ
事をも察し外し

真上上吉 坂東龜藏

[註] 喜相屋の末長出でより外
あね云千本權の形をの推考後
[註] 推考の形を梅の形の中
形は推考の形の中を推考との出
おが形は形と女房小仙が形を

もる所うの形を推考して月を
形考すの形を推考して月を
出考す [註] 大板の形を推考して
いふは形を推考して月を
凡そ倉庫の及ばぬ大板でも
銀文の形を後を窺ふ事しと云き
このと陰より并せあへば後述の
いふでと木板の金文を本意以後
みよの程を又ふりて又總をわら
是との商賣の如くゆきし
[註] 重宝の形とさして志すは形
こそ其まはつとまの同と飛ぶ
事をも察し外し

かゝ見の意を流し一に後をさる
 知延義太夫令仇史也之入たを死
 したまひのり身成子の終る流く
 けつご日の山でうけり天功持場
 の辰を上げ去りてあふを極の
 大生来く天是うが正勝の
 あまひごころいしきもよ方お
 居て志のせりとたおは月をを
 ておふら成ゆせやしき相をこんく

上上吉 申村千之助

天九千宗を失ハ其程云千本様お
 辨由余の殺た原考るる夜おし
 たの辰もて死たよりの出たう
 らりけり天まおりのるもお夜
 こまのこまけり天後程云余様
 おまお玉巻の役大坂と月祥もて
 きのつと陰りけりせあふら相お

お後ハくつと強ひてら成ゆと別
 お目立けり也出世と成外とかく
 おんけりやでらり外天世宗源
 成不七去流女房お流お持もて
 中分也切程云持た長老を家宅
 おぬととるおのわおまはでらり外
 中分也切程云持た長老を家宅
 おぬととるおのわおまはでらり外
 中分也切程云持た長老を家宅
 おぬととるおのわおまはでらり外
 中分也切程云持た長老を家宅
 おぬととるおのわおまはでらり外

上上 向嵐 鱗子

天景徳寺の住子息とらり外余
 若山宗宗若山宗宗若山宗宗

切方三條迄とある事でおは月と
又(升)せふを(升)持れ共老ふ
ま代製ぬさぬつとらせ退
く情出でて取用と名を並ぶる
故ふ世世を(升)を(升)く

上上 山岡義三郎

元禄三丁卯八月廿一日
うらうら(升)の南なるよか
つこ(切)草原氏小中女おき
おらう(升)の(升)お遠者お
お(升)極洋刺よ(升)お(升)ら
か(升)お(升)と(升)あ(升)く

上上土 山岡吉右衛門

元禄三丁卯八月廿一日
お(升)山お(升)大(升)熊田軍
八草原氏と麻生の松原君
田坊何事もお持ま(升)お

師匠のお教をよまお役が(升)外
るお(升)お(升)行(升)せ(升)ら(升)外

上上吉 市川市友

元禄三丁卯八月廿一日
お(升)山お(升)大(升)熊田軍
八草原氏と麻生の松原君
田坊何事もお持ま(升)お

上上上吉 中村友三

元禄三丁卯八月廿一日
お(升)山お(升)大(升)熊田軍
八草原氏と麻生の松原君
田坊何事もお持ま(升)お

うして何れもやせ入してはるすので
行ふの程云の本筋を山崎とれ替へ
又聖はかかを出て居るものと大分の
師とを子ヤリ力成ては舞をて替をを
突てうらの様とことせ九てう事不
成外で居るく 又切替九長考に
書以事と事いんをのいおん歌く
又三宮殿舟の船及の言似いおん
うらゆらう人相が後をかひ替へま
もさうぞおよりあつて舞いた御の
を替へ外ヤし系をえんく

至上上吉 山下金佻

又天まもをのたまさんでう外
あ程云千中極不女房小仙義家
の因信の二夜毎交のお親由中分
家切替九長考不女房あう子
あつてく 又大切方倍者扱不

母方役を極写しうのゆき色
ひの老母役がよふ事外 又聖舞六
の節を打替してえ後をさそ歌対
の出者まこととぬ替もくく又物
がたんのふ枝節と大出系く 又
返お年功の費用をたさぬいお道
共まもをねとぬぬ替り居り外く

大上上吉 山嵐右三席

又一方の大まも大嵐出でう外
あ程云千中極不女房系時後
まらるの股まを花乃より出ま
外在置あ方端中かあ 又ひお股
かよくまぬを替へて先今までの極系
よと中替と大出く 又後
程云金替山小三浦荒次と後
あも舞の股まをまらぬ又物
が扱ひ替へ 又切替係一取上面を

此は内もく野の争ひの如く
何の事とら致す世に建長
その後也よ下まてな舞臺へ車
至徳大寺不度香をよせ供お供
敷の事とて原を糸のふ恥辱をあら
つゝあつていぬお仕内宮のりつり
中宗密をよめて源をのふ云ふれ
敷のつて密をよめて源をのふ云ふれ
敷にせざる知玉極の云ふ来川平
佐野の負名を別てる後ひの幕
より止中分あつたあつて柳殿中
まで大段を爲暢子まで出さしぬ
大舞臺へ候とてお仕内へり
外せあつて四二級佐野のきつら
て下るより源をのふを止我子あつ
らとんを感ふとて不世をりて別
るぬ大あつて表を小協ら

らんであつていぬお仕内へり
何の事とら致す世に建長
その後也よ下まてな舞臺へ車
至徳大寺不度香をよせ供お供
敷の事とて原を糸のふ恥辱をあら
つゝあつていぬお仕内宮のりつり
中宗密をよめて源をのふ云ふれ
敷のつて密をよめて源をのふ云ふれ
敷にせざる知玉極の云ふ来川平
佐野の負名を別てる後ひの幕
より止中分あつたあつて柳殿中
まで大段を爲暢子まで出さしぬ
大舞臺へ候とてお仕内へり
外せあつて四二級佐野のきつら
て下るより源をのふを止我子あつ
らとんを感ふとて不世をりて別
るぬ大あつて表を小協ら

此は内もく野の争ひの如く
何の事とら致す世に建長
その後也よ下まてな舞臺へ車
至徳大寺不度香をよせ供お供
敷の事とて原を糸のふ恥辱をあら
つゝあつていぬお仕内宮のりつり
中宗密をよめて源をのふ云ふれ
敷のつて密をよめて源をのふ云ふれ
敷にせざる知玉極の云ふ来川平
佐野の負名を別てる後ひの幕
より止中分あつたあつて柳殿中
まで大段を爲暢子まで出さしぬ
大舞臺へ候とてお仕内へり
外せあつて四二級佐野のきつら
て下るより源をのふを止我子あつ
らとんを感ふとて不世をりて別
るぬ大あつて表を小協ら

おさ血りのかきるま合杯味いりの
てり林と大出来く見置大坂まで
ハ入の南を多々荒れ田の
あつり林を焼く事しては切
行やどやこわした切でもかぬと
いふ言を有らざるとは幕の
空の切をらぬせ兵隊討手をも
らぬゆゑのりおは内よかや
林せぬ大ありく下キ何れとか
甚衣大入の金々腐れ尖のか骨
トや四切桂川に伝説を
及ぶ級ノ後ありいふ聖徳太子
降事とはか後を大坂までと
おきとぞらも十人の娘も
兼き所のあるまふおあが
其上のたがあつぞうんち
二月らハ入へ林せいで

中京常盤の殿もおは内へよ
が志南庵を住まはれるので
今一の路でりゆく山入
の如杯とんと表れお思
人ぞ川居るの殿も大
保し甚衣ハ別して大
下キどうぞいづく
色氣のたのゆり有るを
てあり林くやと
上上中 **嵐** 和三 師
四 兼村公の四子息で
おおは荒れ小ち内さ
お五 蝦蟇肉を大
並んで出で
小そふ又へ林と
九段月で
くらしらふので

下

下

今村の[○]をめて何やそなく
としかお娘て有と[○]ヤリヤ母
親がそははくのでふか徳てふは石
たとふいお親ふ他ぬ子ハ鬼子トや
とヤ[○]東あて切つる川と持
三あお持まへく[○]てお出せ
有て親はふまざる様あるは親は
上上[○]嵐かのか
[○]時失お長差おかろのそを
控写く桂川不信法をかのは
よふふ未[○]と[○]兵部
後松聖[○]入る[○]をさへ
はいての[○]出せを
上上吉[○]中村[○]甚あ
[○]は[○]は[○]分九[○]を[○]後[○]お
ま[○]思ひの[○]お

ま[○]四[○]腹[○]月[○]ま[○]何[○]や[○]氣[○]不[○]平[○]
お[○]は[○]内[○]で[○]今[○]村[○]七[○]角[○]と[○]今[○]
丁[○]め[○]て[○]今[○]村[○]其[○]う[○]ま[○]り[○]二[○]殺[○]
の[○]夫[○]石[○]森[○]内[○]ハ[○]中[○]分[○]今[○]村[○]せ[○]ぬ
将[○]ま[○]ま[○]を[○]我[○]子[○]の[○]化[○]市[○]を[○]殺[○]害[○]を
西[○]を[○]肉[○]を[○]扱[○]子[○]を[○]受[○]を[○]を[○]を
喉[○]止[○]の[○]か[○]こ[○]の[○]二[○]擲[○]を[○]を[○]故[○]村[○]の
出[○]立[○]ま[○]ま[○]無[○]武[○]止[○]の[○]星[○]ハ[○]何[○]ん[○]の[○]
て[○]何[○]ん[○]と[○]存[○]村[○]天[○]出[○]来[○]く[○]
後[○]野[○]云[○]其[○]ハ[○]總[○]小[○]赤[○]岩[○]一[○]角[○]と[○]
庚[○]申[○]山[○]の[○]な[○]ま[○]く[○]え[○]ハ[○]自[○]自[○]を[○]射
い[○]あ[○]る[○]巨[○]天[○]野[○]の[○]門[○]を[○]集[○]法[○]の
師[○]を[○]ん[○]と[○]張[○]石[○]を[○]西[○]へ[○]見[○]ハ[○]が[○]あ[○]る[○]か
俄[○]小[○]さ[○]う[○]婦[○]を[○]は[○]る[○]知[○]味[○]ひ[○]の[○]で[○]も
り[○]村[○]と[○]又[○]ハ[○]を[○]さ[○]り[○]子[○]と[○]と[○]大[○]入
師[○]失[○]殺[○]角[○]を[○]小[○]女[○]房[○]雛[○]緒[○]の[○]胎[○]肉
子[○]あ[○]る[○]赤[○]子[○]の[○]生[○]血[○]を[○]ぬ[○]き[○]と[○]難[○]容

上上吉◎歳三六三〇

天長元年乙未の歳は元世に在
おを新しと夜の外に上京して
お住を長尾院に力の花を
て梅外史を授けしは三入の
立ての出来てお後におうが
六限目してお老翁を授けしは
強くしてお外に川本九限目
て大早方孫をお勅出共方
切お見おが仕月のよりを又
おけぞ三入の史が下るが由て未
て陰を九上平流不安てか
と一統不協も授けお大史ひで
より外にイキ山内氏の方孫をえて
何ぞお見おが史ふこの由イサア
陰の長サより力孫のかたて款の
寄が長一の史今を又お初めとの

大史ひで有るイサ東御一切掛川
おけの家お久後をいおおまのの
由イサお史は家より又中途
お病氣多き力孫の秋柳史を
て勅をいお久入の史今を又お
外にイサお史は家より又中途
有ておの史はあくお出勅を
たの史外く

上上吉◎生史書寛文の

天長元年乙未の歳は元世に在
おを新しと夜の外に上京して
お住を長尾院に力の花を
て梅外史を授けしは三入の
立ての出来てお後におうが
六限目してお老翁を授けしは
強くしてお外に川本九限目
て大早方孫をお勅出共方
切お見おが仕月のよりを又
おけぞ三入の史が下るが由て未
て陰を九上平流不安てか
と一統不協も授けお大史ひで
より外にイキ山内氏の方孫をえて
何ぞお見おが史ふこの由イサア
陰の長サより力孫のかたて款の
寄が長一の史今を又お初めとの

がきりくを後へ目出とやアと
云ふふ不有とハ東あしくお根
ら不計せ三役十をく女房あま
ふてま下が直身して床よりと思ひ
まて流芳の世一の然ひ書え
お世流女房へはか人ふらりま
書後傳化布をま下お実分下る
へは入ふのかは何ま娘の情愛原
く又お一流ふ大はでら外さ太
長流へは一切が中一の太あうく
少しもお云ふり外せぬ大出来く
書そで後の落歯失のほち一の
おまの如の然がさひさち中をほ
トやハ四役女房かひしめてこそ
せ不い合はつたのとりたほひひ
お程武家の義方へは入るもので
何ふかと思はれ外と書落歯失

のよあせがあははくのおこちが
本でもあくつとて換ふお仕用
きて程三のこおろが合を流合が
とんと面あうあうつと書お流も
何あふ力証あまきめてもあうと
あのを氣あうとあをぬう又へおと
書トキ又さうでがせうつとあのを
おせハお辭ふく後程お花と
お云号ひお精後さるる津流
切極川お松原もお公をうく男
らへの女もてお子抱の如う梅外
史のほとぬと生ひおるらう一合
まをひいて一書へ送へお持まへ
の江を子うてよあつと書お二夜
女房おさぬまでまうとあのを氣
又整状のる遠ひの如う下りあ
のあおあおの後のまかりの君も

大工くくえおおねとぬきま
 女のを思ひ出外中末まてま
 お方が出ると八嬢をくと声
 がかかるぞや不契何ん核判大役を
 一人として引受まよふはまけら
 八嬢の切でなり外目喜喜
 何ぞ難波のたままが踏し並れ
 去ありのるを捨て有り外く
 やし梅花さぬく

搦上上上三掛大入席

不契は女の座は梅林女でなりま
 劣程云老屋翁小豆利也より
 大原よりのお勤八由若者又
 は女の揺る遠者元の全気が掛
 ぬと梅林せんまゆのわらふ
 高この大入全く由一流おまが
 外くくでなり外不契まがよお

る女でなり外不契何をいよのどや

候なるかどや不契在酒工役大屋

は、助役回股同うけ付の奴毎

女のお勤ゆきまゆ不契たおは内不契

おの役あうらうてりようかば

ぬの役身里たぬてりあつた

はぬ花及仲程まで平休はるとる

が不契まゆ不契ぬ不契其方うすま

と服とつた本舞者へまみ判及

ぬ毛の奴はぬ人とも毒まの思ひ入

を能く只つ毎りまてとんと暗くあ

んごぬ八は内より女方から後と

こまうてはるぬあき丹其は工風

有そゆお思まぬ外不契先昔の

事入控へ並申真で思ひ出たあが

る外まの文改すは當年の二の初

三味線にて老人ありあはる幕のうへ
らんらんく [四九] 三役ある事あり
さて又の旅宅へ遊むに成り安ん居る
まへに恨みを改て居る流るる言付
やん方子 [五〇] 枝子他市がうせそめて
あてて是れはあく小柄にては
殺す我大出まきくはあ後ハ内時
はかんふとあ外 [五一] はあゆみの
大あゆみ [五二] 四役二文のあま
ハ内をまきく後往云流解と大村
南をう後獲をの只後一南を我
後を改て布内着るるあ
あ [五三] 後の立廻りの知とはあ後
あとして来たうあをらあ外
後のうー何ふかふるはとつと
てんでまふ外せぬと度ハのあ
がう外せぬあんれが行公でう

外 [四六] 四橋川へ入る方候は妹男ま
あ流して成程新くふん外と
敵を料理する知る後外子酒
の御事ぞこのとまおがう外と
甲子年高時の天を老ヤンとあ
林 [四七] サマ

大上上吉  嵐 晴 寛

[四八] 島内入氣の玉操嵐御頭と
里外あ程云たは流るる言付
勢の島の成るる事 [四九] 三股
目そ我外史の所遊との出合
あふふ出果外と毎念をう
一万の切舟が流るる言付
知よのぞく [五〇] 四股目と下る
出よのぞく [五一] 大なる
外と [五二] 板を切てうの
あふふあ夫の持てやせ

中人あり大出奔く [名] 中へ
所 [名] を [名] するを [名] の力を
得る [名] 格 [名] 格 [名] の
内 [名] といふ [名] と [名] 格 [名] の
た [名] [名] 後 [名] 格 [名] 格 [名] 格
自分のおうけを [名] 格 [名] 格 [名] 格
何 [名] なる [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
が [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
より [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
果 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
ば [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
両 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
なる [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
の [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
を [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
其 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
を [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
を [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格

[名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
あ [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
何 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
で [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
連 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
で [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
と [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
[名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
い [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
り [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
ら [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
又 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
そ [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
如 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
又 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
し [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格
成 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格 [名] 格

おまんと湧る大分中へいせり
井とあり次第春の影よそ大勢
の毒体をとくまきぬがゆげの
火の引がぬつこそ又入のるき
たる事（甲）まより鳥来二入
のおまぬがゆげのる面自赤井
こそゆきまよりふと人をかぶつて
所におは内宮うらふ井と（乙）
おまぬが下るへ送入てうの然ひ
又虫を虫知まきまあ而あ水で
とんとまきまよあうつこそ（丙）
うまてりう定とむけしむり
おまをいあふゆふおまの虫
が落て有ゆむりうりして門へ出
ると地産産を損けをゆきま
残ふ志ゆんだあまきか兵あて
まかてはをまよとあて出てゆ

まうがまの思ひ入の有そのあ
しやあうふと存井と（丁）金井
けおぬの初日の出ぬまきま
こそ才一市人体みあいのおむり
らぬしあふの市段でうり外た
のふあそ丸い形ふあうかむり
ぬきまゆきまゆきまゆきま
しやゆきまゆきまゆきまゆきま
さる井と（戊）まきまも瑞雪入の
刺まのまきまゆきまゆきまゆきま
まきまゆきまゆきまゆきま
でうり井と（己）まきまゆきまゆきま
降の落して高階あて時とぬきま
まきまゆきまゆきまゆきまゆきま
た現近代のまきまゆきまゆきま
まきまゆきまゆきまゆきま

役者名山並 下終

下終

能者

浪花好人

平安住

能優堂夢遊

大坂書林

河内屋平七

京都書林

吉野屋勘兵衛

名古屋書林

金銅屋米藏

本阿

大坂心齋橋通本町南口入

書林

河内屋平七板



